

フィリピンでのお産と子育て

(1) 医療システム、病院、妊娠中の過ごし方

海外出産・育児コンサルタント

Care the World 代表

ノーラ・コーリ

【 はじめに 】

フィリピンというとたくさんの子どもをイメージしますが、まさにそのとおりでした。道を歩いているとどこからともなく子どもたちが現れて、声をあげて楽しそうに遊んでいました。子だくさんは主にカトリックの影響で、信者の多くが避妊をする習慣がありません。さらに子どもたちは労働力となり、老後を見てくれると人々は話していました。なによりも子どもに恵まれることは幸せであり、家族の富とさえみられています。そのため、妊娠、出産、子育てはフィリピン人にとっては当たり前にあるものとしてごくごく自然に生活の中にとけ込んでいました。

今回のフィリピン訪問では日本人や裕福な現地の人達が出産する施設と合わせて、貧しい人たちが出産する病院も訪れてみました。さらに、日本人でもマニラに駐在しているご家族、フィリピン人の夫をもつ日本人で地方都市に住んでいる方々にもインタビューしました。

結論からすると、フィリピンでのお産は地域によって、家族の経済力によって、生活の形態や習慣に大きな違いがあり、病院によってもかなり違うという印象でした。フィリピンでは貧富の差が大きいので、裕福な家庭はグレードの高いサービスを受けられますが、そうでない家族は必要最低限のお産になります。まさに千差万別です。ここではさまざまなお産を紹介し、どのような選択をしていけば、より安全で納得のいくお産ができるかをお伝えしていきます。



子ども達の時間はゆっくりと過ぎている

Photo by Nora Kohri

【 妊娠したら 】

多くの日本人駐在員が住むマニラには日本人のための診療所があります。そのため、多くの方がまず診療所で妊娠を確認し、その後も診療所の産婦人科医で診察を受けていました。妊娠中の不安を日本語で相談できることは何よりもの安心になります。中には診療所でほかの産婦人科医を紹介してもらい、ほかのクリニックで定期健診を受けている人もいました。フィリピンではクリニックの産婦人科医で診てもらうためには紹介状を必要とします。

母子健康手帳も英語と日本語が併記されているものが大使館を通じて手に入るの、妊

娠中の経過などを記録することができます。しかし、このように恵まれた環境でありながらも、やはり日本からはそれほど遠くないということで妊娠中はフィリピンで過ごし、出産は日本でという方は多いようです。

フィリピンはカトリック教徒が80%です。宗教的に人工中絶は禁止されており、よほどの健康上のリスクがない限り施されません。

【 医療システム 】

妊娠中の定期健診はクリニックで受けます。出産をしたり、帝王切開をしたりするのは病院で、回復のための入院の設備も整っています。フィリピンの病院はオープンシステムを取り入れています。担当となる産婦人科医は病院の外に、あるいは病院の中に病院とは別に独立した個人経営のオフィスを構えています。たとえば病院内に病院とは別経営の産婦人科のクリニックが入っていて、グループで診療を行っていれば、クリニック内にいくつかの診察室があり、曜日や時間ごとにいろいろなドクターがその診察室を使用します。1つのクリニックには2人くらいの専属の看護師がいて、各ドクターのアシスタントなどをします。電話予約、受付は別なスタッフが担当しています。そして、クリニックの産婦人科医は分娩設備のある病院に通い、患者の分娩に立ち会ったり、入院中の患者を訪問したりして回復の経過をみていきます。

大都会から離れた地方都市の場合も妊娠中はやはり町の産婦人科のクリニックへ通い、お産は入院設備のある病院でします。その際には、クリニックのドクターが来て出産に立ち会ってくれます。ある程度の大きな町であれば、現地の人でも病院で出産をするのが一般的です。また、助産院で出産することもできます。しかし、さらに奥地に進むとまだまだ自宅分娩が一般的なようです。

【 病院 】

マニラでトップクラスのうちと称されているのは私立のマカティ・メディカル・センターです。総合病院で24時間の救急医療も行っています。今回はこのセンターを訪問しました。設備面でも衛生面でも世界標準なものでした。医療機器類も十分揃っていました。そして、多くの日本人がここで出産していました。

救急が生じた場合は、日本人が利用するような私立病院と提携している救急車搬送会社に連絡することになります。マニラなどの大都市の渋滞を考えるとあまりお勧めではないようです。状況に



マカティ・メディカル・センターの正面玄関

よっては呼んでから現場に到着するまで2時間以上かかることもあるからです。救急室は必ずしも富裕層の患者だけが利用しているとは限らないようです。また、研修医(インターン)が担当になることもあるので心得ておきましょう。

Photo by Nora Kohri

ほかには、ケソン市とグローバル市にもあるセント・ルークス・メディカル・センターを利用している日本人もいました。ここもマカティ・メディカル・センター同様の高い国際レベルの医療を期待できます。また、マニラ近辺に最近できた病院などでも積極的に陣痛・分娩・回復が一室で行われる部屋を設けています。

ことばの面においても、外国人患者を積極的に受け入れるこれらの病院ではドクターはもちろん英語を流暢に話しますし、スタッフもほぼ全員が英語を話すので安心です。中には日本で医学を学んだ医師もいますので、日本語が通じることもあります。

【 医師と医療スタッフ 】

日本人駐在員家族がかかる産婦人科医の多くはマニラの代表的な病院で研修を受けているか、フィリピンの大学、もしくは海外の大学を卒業しています。これらの優秀なドクター達はフィリピン産婦人科学会が発行する専門医証明書をもっています。マカティ・メディカル・センターでもこのようなドクターが病院と契約していて、お産の時はその病院を使用しています。男性のドクターもいれば、女性のドクターも大勢います。

これらドクターの多くが患者との関係をととても大切にしている、いつでも連絡がとれるように携帯電話番号を渡していました。主治医は妊娠期間中の診察をし、お産に立ち会い、さらに産後の回復まで診てくれます。病院では看護師も受付事務のスタッフも、英語が通じます。

【 妊娠中の過ごし方 】

フィリピンは年間を通じて暑いです。特にマニラのような都会は建物が密集していて、車も人もごった返している状況です。そのため、気をつけていないと暑さで体力を消耗します。さらに、どうしても車での移動が多いため、運動不足になりがちだと現地の日本人ママたちは話していました。そのため、日本人妊婦さんの中には朝早く、あるいは陽が沈んでからの涼しい時間帯に散歩をしたり、スイミングをしたりして運動不足を解消している人もいました。妊娠中の過ごし方のオプションとして、ドクターからもスイミングは奨励されていました。また、日中の運動不足解消と早く生まれてきてくれることを願って、予定日近くになってからは涼しくて広いモール内を歩き回っていたという方もいました。体重に関してはドクター側ではあまり厳しく管理しないので、むしろ自ら気をつけていないと増えすぎてしまうということでした。ただし、日本人の妊婦はむしろほとんどが体重を増やすように指導されていました。

都市部では建物内はエアコンが効いているので快適です。ただし、デパート、レストランによってはエアコンが効きすぎているところもあるようなので、カーディガンを忘れずにとのアドバイスもありました。暑さゆえに腹帯などは必要ないでしょう。フィリピン人の妊婦さんはおなかが大きくなると、おなかを下から抱えて歩いている姿をよく見かけました。

食べ物に関しては農薬を多く使っている野菜や穀類もあるようなので、それらを避けるためにはなるべく自然食品やオーガニックのものを食べるようにと日本人の母親は勧めていました。体重はむしろ増えたほうがよいという考え方がフィリピン人の間にはあり、そのためか日本人の妊婦さんたちは周りのフィリピン人達からたくさん食べるように勧められるようです。

旅行に関しても特に制約はなく、むしろ「楽しんでいってらっしゃい」とドクターから声をかけられたという方もいました。また、妊娠中の不安材料の1つとして社会情勢がいつ不安定になるかわからないので、「産気

づいた時に病院へ向かう手段がなくなったらどうしよう」と話している方もいました。

【 妊娠、お産をとりまく考えや言い伝え 】

フィリピンではお産に関して独特な考え方があります。まず、男の子が生まれることがもてはやされています。最初が女の子だと、「では次は男の子ね」と会話が続くそうです。それは特に跡継ぎにということではなく、女の子だといずれは結婚して姓が変わるので、自分たちといつでも一緒であってほしいという願いから姓が変わることに寂しく感じるようで姓の変わらない男の子がほしいという考えがあるようです。また、外国人の血が混ざるとは肯定的で、かえって誇りに思うようです。

地方によっては妊婦は恵みを象徴し、幸運をもたらすと捉えています。子どもがたくさんいることはその家庭の豊かさを象徴します。貧しい家庭にとっては子どもが収入源になると受け止めているほどです。ですから、教育に重きを置き、卒業証書や学校などから表彰状や表彰リボンをもらおうと、それはそれは大切に壁などにかけて訪問した人たちに自慢します。そして、いずれは子どもに老後を支えてもらおうと思っている親も大勢いるようです。

ほかにも、さすが子どもがたくさん生まれる国だけあってお産にまつわる言い伝えや慣習が数多くあります。

- 有機物で育った赤いお米やさつまいもを食べると産後の出血が少ない
- ハーブを妊娠中、分娩時、産後の回復期において使う
- 妊婦は重いものを持ってはいけない
- 妊婦を苛立たせたり、論争させたり、不満にさせたりしておく、それらのネガティブな感情が胎児に悪影響を及ぼすので、妊婦の願いや希望、時にはわがままと思われるほどの要求も尊重する
- 胎児の首にへその緒が巻いてしまうかもしれないから肩や首にものを巻かない
- 紐をまたぐと転ぶかもしれない。すると胎児も転がって逆子になるかもしれないから紐はまたがない
- 月夜は胎児に悪影響をおよぼすので、帽子をかぶって外出する
- 家の戸口に立ってちょっとした立ち話でもしたりすると難産になる
- 妊娠8カ月を過ぎるまでは赤ちゃんのものを買い揃えてはいけない
- 長い昼寝をすると赤ちゃんが大きくなり難産になる
- 安産のために熟していないココナッツのジュースを飲む
- よいお乳が出るように、妊娠後期にはココナッツオイルで乳房のマッサージをする

次回は定期健診の様子とどのようなお産が可能なのかについてお話いたします。